



## 震災報道の会話分析

檜村, 志郎

---

**(Citation)**

会話分析への招待:148-172

**(Issue Date)**

1999-02

**(Resource Type)**

book part

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006550>



## 震災報道の会話分析

樫村志郎

### 1 震災をめぐるニュース

本章では、語る活動としてのテレビニュースをとりあげ、その会話分析の試みを行う。はじめに、第1節では、トーク（語り）としてのテレビニュースにはどのような社会的組織性があるかを一般的に考える。第2節以降では、1995年1月の「阪神淡路大震災」を伝える当日のテレビニュースの録画にもとづくトランスクリプトを示して、震災を伝えるニュースの社会的組織性を具体的に示すことにする。

まず、大まかにいうと、ニュースは「受け手が体験していない事実の伝達」であるといえる。たしかにニュースを送り出す活動においては、受け手の知識の状態が現実に測定されるのではないが、送り手は、受け手の「想定された知識状態」を判断しつつ、ニュース活動を組み立てる。そこで、語りとしてのニュース伝達活動の本質的な要素は、「受け手が知らない」と送り手が想定する事実の存在の主張であるといえる。

1995年1月17日未明に起きた「阪神淡路大震災」（この呼称自体が新聞・テレビ等によるニュース伝達活動の中で作り出された）においては、テレビニュースの社会的な効果と限界のいくつかが明白にあらわれた。

社会的な効果としては、震災当日朝から流されたテレビニュースは、大震災の被害を刻々と伝える速報性と臨場感をともなうニュースを作り出した。他方、テレビニュースの多くは、大震災の被災者の感覚から離れたニュースと感じられるものであったとともに、取材方法をめぐる批判や反省をもひきおこした。被災者の視点とか被災者の目の高さに入った報道が必要だという声があげられた。それに対しては、災害報道はそもそも被災者以外の人々を主要な対象としているという議論もなされた。その際、災害報道の目標は、救援のための世論をもりあげ、また基本的には、事実を事実として報道することがニュース・メディアの責務であると主張された。これらの議論は、テレビニュースの社会的限界をめぐるものであった。

ところで、大震災ニュースの在り方をめぐる議論を見ると、ニュースによって達成された結果や達成されなかった結果に論議が集中し、大震災報道ではなにがどのように伝えられていたのか、という点には注意が向けられていないと感じられる。当然のことだが、ニュースを聞いた人々はニュースがなにをどのように伝えたかを見知っているといえる。しかし、エスノメソドロジーの諸研究が明らかにしているように、人々の日常行為には、見知られているが注目されることがない (seen but unnoticed) 諸様相が存在する。ニュースを伝える行為やニュースを聞くという行為は、通常の実践に間に合う合理性 (rationality for all practical purposes) によって指導される行為である。その行為の中では、この合理性の存在は見知られているけれども注目されない地位を与えられている。エスノメソドロジーは、この合理性を問題にするために、行為に対する日常的態度を停止し、通常の実践に間に合う日常的行為実践 (practices of everyday life) の構造をあらためて観察、記述していこうとする活動である。

そこで、大震災報道でなにがどのように伝えられていたのかという

問題は、伝え手の達成の問題や聞き手の記憶の問題ではなく、また、必要な報道の在り方についての仮定に照らしてそれを批判したり擁護したりするという問題でもなく、日常の行為実践としての大震災報道がその報道行為の在り方としてなにをどのように述べたのかという問題である。

ところで、震災当日に限って見ても、震災を「ニュース」として伝える放送には、震災を伝えるためのさまざまな形式があったことがわかる。今回の震災を伝えるテレビニュースには、つぎのような違った諸形式が見られたが、それらの形式の違いに応じて、画面を見る人々の経験は異なったものであった。

「標準ニュース」は、主として一人のアナウンサーが、録画画像等とともに、ニュースを読み上げるという形式である。「映像レポート」は、映像を中心とするレポートであり、映像を送る現場にいるレポーター（例えば、ヘリコプター上のレポーター）が、スタジオと対話しながらニュースを伝えるなどの形式である。「現地インタビュー」は、被災地外のスタジオにいるインタビュアーが被災地内にいる人と対話をする場合、および現地取材中のレポーターが現地の人と対話するという形式である。この形式は、「標準ニュース形式」や「映像レポート」の枠の中で採用されることもある。「中継レポート」は、現地取材中のレポーターが取材結果をカメラを通じて報告したり、スタジオと対話するなどの形式である。これもその中に「現地インタビュー」「映像レポート」を組み込むことがありうる。最後に、「解説インタビュー」は、ニュースの事実関係を整理するなどの目的で専門家や解説委員がアナウンサーやキャスターと対話するなどの形式である。

震災に関する放送にはこのほか、形式上、狭い意味でのニュースとはみなされないが、震災に属する諸事実を伝達するその他の形式が存在した。それらは、生活情報、警戒情報、復旧情報、記者会見、安否

情報、死亡者リストなどによばれうる。

## 2 テレビニュースの会話分析

本章では、「会話分析」を、日常会話の分析に限定された理論や方法としてではなく、より一般的に、(またその本来の在り方にしたがって)「話すという人間の活動」が、複数の会話者の間の、微妙に調整された記号の交換行為である、という考え方をもとにしてとらえる。そうするとそれは、さまざまなコミュニケーションを通じて伝達される意味の成り立ちやそのまとまりを発見しようとする理論および研究方法としてとらえられる。この記号の交換行為は、日常自然言語(natural language)において中心的重要性をもつが、一般に「語り(トーク)」とよぶことが適当である<sup>1)</sup>。語りは、その理解について二人以上のメンバーが存在しなければ成立しえないという意味で、本質的に、相互行為(inter-action)である。

このように理解された会話分析は、主として三つの方法論的基準に従うものである<sup>2)</sup>。(1)会話分析は、語りの中で発せられる発言をその語りの流れの中で理解しようとするものである。(2)それは、そのトークについて自然言語的熟練をもつ参与するメンバーが語りを行うために用いている方法に即する分析である。(3)それは、個々の語りの流れの中から、そのトークに固有のものとしてメンバーがとりあつかう、「意味」という現象があらわれ出てくるありさまを理解することを目標にする分析である。

震災報道の会話分析は、日常的行為実践としてのテレビニュースの現場における詳細の再提示(re-specification)を課題とする。以上のような課題は、「視聴者が画面を見る経験」を分析の焦点に合わせることで達成することができると考えられる。

「視聴者が画面を見る経験」に焦点を合わせることは、二つの点で方法論的な利点がある。

(1) 画面を構成する音声と画像は、視聴者がそれを見ることの中で、震災の「意味」を視聴者に対して構成すると考えられる。この意味構成の詳細の主要な構成要素の一つは、画面それ自体である。そしてその視聴経験のある側面は送り手による想定の中で先行的に把握されていないからではない。テレビニュースの画面がいかにか構成されているかは、テレビニュースの録画を繰り返し、詳細に観察することで、分析的に再把握することが可能である。

(2) テレビニュース視聴経験のもう一つの主要な構成要素は、視聴者自身である。震災を経験しつつある被災地域の住民にとって、震災のテレビニュースは、伝えられる破壊が衝撃的であった以上に、その光景がみずから見知っていると社会的に主張できるべきものの破壊であったという点において、衝撃的であった。つまり、破壊された地域について社会的にサンクションされた前もっての記憶をもつ視聴者は、その視聴経験のただ中で、その破壊の光景を破壊以前の光景と重ね合わせることが自然であり、そのことが、テレビニュース視聴経験の中で重要であったのである。これに対して、そのような記憶のない視聴者にとっては、このような重ね合わせは、想像上でしか行われえなかったのである。

こうして、テレビニュースの意味構成について明らかにするためには、その視聴者がだれであったかに注意しなければ、意味のある分析を行うことができない。視聴者としてだれを想定するかは、方法論上は、分析の便宜を考慮して定めるべきことがらである。

以下の分析では、それと明示しない場合には、私は、震災によって打撃を与えられた地域を、上に述べた意味で前もって見知っており、その意味で、被災地の以前の在り方に対してコミットメントをもつ人

々を視聴者として想定している。これは、私自身の経験を分析に用いることを可能にするためと、被災地域にコミットメントをもつ人々の見方を採用することが、テレビニュースの在り方に対して批判的な異様化作用をもち、ひいては、テレビニュースの日常的秩序維持作用を浮き彫りにする力をもつと考えるからである。

### 3 「標準ニュース」

テレビニュースの標準的形式をよく示していると思われるのは、震災当日午後3時8分のニュース（資料A）である。

ここでいう標準的形式というのは、テレビニュースがごく普通にもっている伝達・表現の形式のある組み合わせのことである。

ここで、以下の分析で注目される「(諸)形式(forms)」というものの意味について、簡単に述べておこう。それは、複数のテレビニュースに規則的に見られるということから、テレビニュースの「約束事(conventions)」とか「規則性(regularities)」といいたくなるかもしれない。しかし、そのように述べることは誤りである。以下で注目する「形式」は、テレビニュースを視聴するという経験の中で構成されつつ利用される状況特有の合理性であって、個々の具体的な「いま・ここの視聴経験」と独立に存在する形式でもなく、視聴される個々の具体的な「いま・ここのテレビニュース」と独立に存在する経験の形式でもない。いいかえると、それらは「対象」に属するものでもなく、認識する「精神」に属するものでもない。それらは、それらが視聴されることによって、またそれらの中で、そのテレビニュースが普通のテレビニュースである「それ」として通用することができる、現象依存的(indexical)かつ現象内在的(reflexive)な諸特性のことである。また、つぎのような違いも意識しておく必要がある。約束事や規則性

という言葉には、それに従うことによって、ものごとはプラスに評価されるといふニュアンスがあるが、ここでいう形式には、プラスという意味合いはなく、いわばその価値は、正確なゼロ（マイナスでもプラスでもない）であるといえる。また、同じく約束事や規則性という言葉には、それに従うことができるとか、限定された意味世界にのみ属するというニュアンスがあるが、ここで注目されている「形式」とはそのようなものではなく、相対的にのみ限定的で、距離を置いて認識されうる、現象の実在的特性のことである。

そのような一般的形式として、送り手／受け手はいくつかのことに気付いている。

(1) それは、アナウンサーが正面を向いた画像（正面画像とよぶ）によって始まり、終わる。例えば、「3時8分のニュース」（資料A）では、アナウンサー正面の画像が#10の場所ではさまれることにより、「ニュースが繰り返されている」（「同じ原稿が二度読まれている」という印象を自然に作り出している。

(2) 死亡者数がタイトルとして映像とともに表示されている。これは、新聞記事でいう「見出し」にあたる特徴をもっている。それを読むわれわれは、正面画像によって区画されたニュースがなにに関するものであるかを前もって理解する。

(3) タイトルの中では、死亡者数が示されるのが通常である（一般的に、新聞ニュースの見出しにおいても、事故や事件のポイントを構成するために数が使われる）。その他、ニュースの多くの部分が、さまざまな数への言及によって成り立っている。

(4) 画像は、ニュースの語りと直接明白に連動しておらず、なにかわからない理由や原因によって、語りと同時に流されていることがある。例えば、#2の画像は、語りの内容とは直接明白には関連していないと感じられる。その語りは、画像の中で表示される文字（テロップ



文字列)と関連しており、画像そのものは文字の「背景」にすぎない。ここでいう直接明白な関連とはどういうものかは、重要な論点であり、後にとりあげよう。別の関連性の下では、画像は単なる「背景」ではなく、地震の被害の大きさを「証言する」ものでもあると感じられることもある。そしてその場合は、画像と語りの間の微妙だが驚くべき一貫性によって、それは報道の行為の中で示されている。例えば、#2の画像があらわれる直前に、この地震はつぎのように特徴づけられている。「日本国内では高度な、機能が集中した大都市がはじめて、大きな被害に見舞われた地震になりました」。この直後の映像はこの語りを、映像の領野で再現しようとするものにほかならない。

(5) テロップ文字列は、ニュースの語りと直接明白に連動していないことがある。その際には、それは画像との間により関連づけられていると感じられる。例えば、#3の画像は、テロップによって説明されているとわれわれは感じる。つまりそこが西市民病院である、と理解する。

(6) 一つの画像の意味はそれに先立つ画像やそれに引き続く画像によって明らかにされうる。#4の病人は西市民病院(#3)へ運ばれた病人と考えられる。また、それとともに、#4の時点において(#3ではないことに注意)われわれは、西市民病院の中に今見ている病人が運び込まれたと考える。だが、#20の火災をわれわれは西市民病院の火災であるとは考えない。

等々である。以上の示唆によって、われわれはニュースの画像の意味深さをその細部にわたってほとんど際限なく記述していくことができることが明らかであろう。

以上のことを、やや抽象的な仕方で述べれば、ニュースの報道の全体は、選択的な多様性をもちつつ関連しあう細部から成り立つまとまりをもっているということである。そのまとまりを作り上げている形

式にはなんらかの一般的な規則性があると証明できるかどうか、これは一つの重要な経験的な問題である。私は、そのような規則性が見いだせるはずだと考える（それを文化とよぶことができるだろう）が、それは綿密な細部の解釈の努力を要する困難な作業であるとも考える。

ところで、以上の分析で用いてきた「直接明白な関連性」という概念について簡単に説明しておくことにする。これは、二つの細部の間に文字通りの関連性があることである。例えば、「兵庫県南部地震597人死亡」というタイトル文字が表示されている場合に、語りが「なくなった方は、ごひやく、きゅうじゅう、しち人」と進行していく場合である。テレビニュース形式でない報道においては、「直接明白な関連性」がより容易にまた一般的に観察できることもある。例えば、死亡者名簿の読み上げ、お風呂屋営業情報や給水所情報が地図を示しながら伝えられる場合などである。これらの場合が、「ニュース」としてではなくむしろ「被災者生活情報」などと名付けられていることは示唆的であるかもしれない。なぜなら、以上の観察が示していることは、テレビニュース形式の震災報道にはそれらが欠けがちであるということだからだ。

ここまでの分析はつぎのようにまとめることができる。

(1) ニュースの始まりと終わりがアナウンサーの正面映像によって区切られている。このことによって、視聴者は、ニュースを確定した意味の領域（「この一片のニュース」）として理解するとともに、その理解を用いて「この一片のニュースの意味はなにか」を問いかけていくことが可能にされている。

(2) ニュースの主題（タイトル）がテロップ文字で表示されている。

(3) タイトルの中、その他の重要な形で死者数が示されている。

(4) 画像と文字、ニュースの語りの間には「探求可能な」関連性がある。この探究可能な関連性は、第一に、死者数の文字と語りのよう

な、「直接明白な」関連性であり、第二には、「高速道路の倒壊、公的大病院の混乱、商店街の破壊」と「高度に機能が集中した大都市」との間に見られる「常識カテゴリー的な」関連性である。

(5) 画像は、ニュースの語りや文字の現実性を「証言する」。

(6) ニュースで流される画像同士により画像の意味が明らかになることがある。

#### 4 映像中心のレポート

画像と語り、文字との間に探求可能な関連性があることは、ニュースの伝え手によって意識されることがある。「直接明白な関連性」がない場合であっても、われわれは「間接的なまたは隠れた関連性」を探知することができる。テレビニュース形式の震災報道は、大幅に、このような探知可能な関連性によって、まとまりとして成り立っている。このような関連性は、画面その他の具体的詳細を用いてよりなにかほかのものを暗示するというやり方であるから、報道情報の象徴化とよぶことができよう。このことはあらゆる情報について起こりうるが、それがもっとも明らかになるのは、映像情報に起こる象徴化であるように思われる。この点を明らかにするために、二つの別の時点の報道を見ることにする。

資料 B では、アナウンサーは、交通被害と復旧・見込みの情報を伝達しており、画像は、各種の交通手段の被害を「象徴的に示す」役割を担っていることが明らかであるのではないだろうか。この報道では、アナウンサーが、画像と語りの象徴的関連性を強化する行為をおこなっていることもわかる。

第一に、#2において、上空からの線路の映像が映し出されるが、これは、全体の概略情報が終了し（「復旧までにはかなり時間がかかる見通

しです)、JRに関する情報に移る旨が述べられた直後である。また、#11で阪急伊丹駅の映像が映し出されるのは、私鉄の情報に移る旨が述べられた直後である。資料Bにはないが、これに引き続きニュースでは、高速道路の映像が映し出されるのは、高速道路の情報が伝え始められる直前である。このように、テレビニュース形式の報道では、語りの細部と映像の細部は一致しない(例えば阪神電鉄の情報が伝えられているときでも阪急伊丹駅が映し出されている)が、語りの細部が属する一つの常識カテゴリー(JR、私鉄、高速道路、地下鉄……。さらにその上位カテゴリーは「交通機関」と画像の細部が属するカテゴリーが共通であるように、語りと画像の関連性が組み立てられているのである。両者を結びつけているのは、視聴者も知識としてもっているはずなのだが、この「常識カテゴリー的」関連性である。

第二に、#2においてJRの画像が映し出されたにもかかわらず、画像と語りの間の探知可能な関連性は、画像が単なる線路であり、テロップの説明もないために、探知が困難になっている。アナウンサーの挿入的な発言「えー山陽新幹線の新大阪姫路間とそれから東海道山陽線の尼崎西明石間は、えー被害が大きく、ごらんのような状態になっております、これは新幹線です」は、(画像がJR線であることを明白にすることで)上に述べた問題を解決するように意図されたものと推測できるが、ニュースの中に東海道山陽線の情報も入っていたために、「ごらんのような状態」が東海道山陽線のものであるのか、山陽新幹線のものであるのか、常識カテゴリーを利用できる視聴%にとり、両義的になったことの影響も受けている(東海道山陽線は直前の語りの細部であるのに対して、東海道新幹線は映像の細部として存在している)。

またこのニュースの別の場所では、おそらく阪神高速道路の上部らしい映像が、山陽自動車道の通行止め情報の背景として用いられている。

このような報道においては、画像は高度に象徴化されているといえよう。画像には、「受け手に伝えられるべきニュース」を構成するどんな具体的場所もふくまれていない。映し出されているこの場所が正確にいえばどこであるのか、横転している車がだれのものであるのか、そういった具体的細部は、報道のまとまりある全体の中で、どんな価値ももたないものにされている。それが伝えているのは、常識カテゴリーとしての「高速道路」の被害（の常識カテゴリー的「大きさ」）であり、それ以外のものではない。

つぎに、資料Cによって、当日朝の典型的な「映像レポート」の断片を簡単に見ることにしよう。これは、ヘリコプターから自ら撮影しているカメラマンによる映像レポートであり、上に見たニュース映像とは対照的な用いられ方をしているともいえる。これはスタジオのアナウンサーとの間の語りであり、標準形式の中に埋め込まれたレポートである。録画映像ではなく、同時中継映像が使われている。ここでは二つのことを指摘したい。第一は、中継カメラマンの語りは、多くの沈黙を含み、また、発話がなされるときにはそれはいつも映像の細部へと言及しているということである。第二には、このようなリアルな中継映像においてもすでに映像の象徴化はひそかに始まっているということである。

第一に、中継カメラマンが沈黙することは、単に伝えることがないことを意味しない。事実は逆であり、映像によってなにごとかが伝えられているからこそ、沈黙が起こるのである。さらに発言のほとんどすべては、画面の現象の細部へと言及している（この中継では、カメラマンは、モニターをのぞき込みながらカメラを操作し、夢中で話した、と後に新聞で語っている）。ここでは、ニュースは映像で伝えられており、語りはそれを補助しているにすぎない。テレビ報道の速報性、臨場性という性質はこのようにして生じるのであろう。ただし、このような

報道は、テレビニュースの大部分ではなされていない。

第二に、中継カメラマンの語りの中には、映像の意味を確定しようという意図をもちながら、それに失敗しているというものがいくつか見いだせる。横転している電車が上りか下りかという問題（これは通勤客の性格や人数に関わる）、画面に見えている駅が阪神電鉄のどの駅なのかという問題、火災の市街地の性格、火災の勢いに関する判断、などである。ヘリコプターからの映像によっては、これらは確定できず、推測に頼らざるをえないということから、映像の具体性の一部がすでに失われることになっているのである。

中継カメラマンの努力は、すでに映像の真実性や意味的確定性の確立に向けられているのではなく、得られた映像を通じてなにごとかを伝えるということに向けられているとさえいえよう。炎上する家や線路自体が伝えられようとするのではなく、より一般的な事実としての、「電車が横転していること」、「火災があちこちで起きていること」、「線路が高速道路と同じように折れ曲がって落ちていること」などが伝えられようとしている。映像と音声によるニューストークは、そのような読みを促すように、その場その場で構成されてもいる。

その際、映像には欠陥があることが当然のこととみなされている。カメラマンの努力の一部はこの当然の欠陥を是正することに向けられているが、その際には、映像の真実性や確定性が理想とされるのではなく、その有用性を「とりあえず」「実際の役に立つ程度に」確保することが関心事となっている。伝え手が伝え手であるのは、手元に得られた一片の映像を通じて権威あるニュースソースとして語るための熟練を発揮できる限りにおいてである。

一般に、映像レポートでは、映像が音声語りを凌駕する中心性をもっている。したがって、音声は常には必要とされない。画面がそれを伝えるのである。しかし、「それ」とはなにかが問題である。映像レ

ポートを構成する映像の意味は不確定性を免れていない。したがって、映像レポートでは、映像の不確定性を取り除こうとする自然言語によるコメントや説明が行われることになるのだ。

## 5 トークとしてのテレビニュース

本章でとりあげたテレビニュースにおいては、主として映像と音声の語りがニュース伝達の形式的構造を作り上げている。個々独特なその場その場の結合は、視聴者によって、「事実そのものの伝達」として見られることはもちろんあるが、それだけでなく、視聴の中でその意味を読み解かれるべき独特の制作物として「ニュースの意味」を伝達してもいる。この「意味にみたされたニュース」は、「事実そのものの」と常に二重写しとなってニュースを構成しており、その結果として、「ニュース」は、画面に写されている事実（の一部）というよりは、ある一般性をおびた出来事の語りとして存在することになる。

長田区の火災や阪神高速道路の倒壊といった映像は、震災ニュースの事実としての衝撃が沈静化したのちも、「阪神淡路大震災」を象徴する映像として、ニュースの語りの中に定まった地位をもつにいたったが、そこでは、ニュースのあらゆる細部がもつ具体的な臨場感は失われ、現に存在する震災の細部から切り離された、いわば「空虚な」細部や記憶されたにすぎない臨場感を生産するようになった。「伝えられたもの」の存在がその具体性をうしなうとともに、それを見る経験は「被災者」の世界から一層切り離されることになったのである。

本章では、映像と語りを中心とする大震災テレビニュース視聴の社会的構造を中心としてとりあげ、テレビニュースが特定の読みを招き寄せる構造をもっていることを垣間見た。それによるとこれらのテレビニュースは特定の仕方で読まれることを促す制作物であるが、この

一般的特徴は、震災ニュースのその他の類型においても原則として見て取ることができるものである。とりわけ、報道記者が現地に赴いて、または電話などの通信手段により取材する映像と音声を主要な構成要素とする「現地インタビュー」、報道スタジオにおいてある種の専門家と報道記者が対話を行うことを主要な構成要素とする「解説ニュース」においては、ニュースの社会構造は、本章でとりあげた類型に比べ、音声による語りにより依存するものといえる。これらの類型での意味的構造は、映像と音声が対等に近い「標準ニュース」や「映像レポート」とは、著しく異なるとともに、共通点もある。これらを含む震災ニュースの会話分析については複数の別稿を予定している。

最後に、テレビニュースに会話分析の手法を応用することによって、なにが見えてくるかという問題について、一般的な答えを与えておこう。

会話分析の対象である「語り」一般は「読まれる（聞かれる）情報」という性質をもつ。ニュース・トークは、日常会話にまして、ある読み（聞き）に向けて作り出された語りであるということが出来る。この語りの構成には、日常会話と比較すると、判別可能ないくつかの制度的条件が寄与している。

テレビニュース・トークは、この点で、会話分析で普通扱われる日常会話とはいくつかの点で異なっていると考えられる。本章での分析は、そのような語りの形式的特性のいくつかに注目したものであった。本章でとりあげることができた形式を含め、そのような特性はつぎのようにまとめることができる。

(1) ニュース一般は「作り出された語り」である。ニュースの伝達は目的的な活動である。それは、ある出来事を注目すべきものとして刻印し、それを一定の社会的形式にしたがって、社会の組織の中に埋め込む活動である。テレビニュース・トークは目的的な活動である。



(2) テレビニュースは、送り手と受け手の同時性をもつ語りから成り立っている。それは、新聞ニュースのようにまず記事という語りとして「完成された」形式をもつことがない。テレビニュースを構成する要素には、書かれた文字や図なども含まれているが、その主要な部分は、画面の中で行為する送り手の調整された共同作業から成り立ち、受け手はその共同作業を同時的に経験する。文字や図もその共同作業の中で提示される必要がある。こうして、テレビニュースは、録画によって構成される場合であっても、送り手と受け手が常に現実に共有する「放映時間」の流れの詳細によって構成されている。

(3) テレビニュースは、送り手によって「概括的に計画された枠組み」に従って放映される。そこには、舞台芸術や演芸などとよく似た、計画性と即興性の混合が見られる。報道を構成する語りの計画性と即興性は、報道の演じ手でもある送り手たちがテレビニュース・トークの「ルール」を相互に尊重することから成り立っている。

この計画性と即興性の混合の一つのわかりやすい例は、前もって編集されたビデオ断片の放送をライブ放送の中に埋め込むという作業が常に完全には成功しないという事実である。ここでは、ビデオ断片の再生開始とライブ放送の語りとの間に、「語りの速やかさ」<sup>3)</sup>が確保されなければならないという「ルール」が遵守されなければならないが、その速やかさは多くの場合達成されない、という事実が見られる。つぎの例を見よ（簡略化してある）。

- |    |       |       |                         |
|----|-------|-------|-------------------------|
| 1  | レポーター | :     | ヘリコプターが神戸、あるいは大阪につきしだいま |
| 2  |       |       | たお伝えしたいと思います。           |
| 3  | キャスター | :     | わかりました。それではここで、震度6を記録しま |
| 4  |       |       | した神戸、神戸駅と先ほど電話がつながりましたの |
| 5  |       |       | でそちらの模様をお聞きください。        |
| 6→ |       | (2.5) |                         |

## 7 インタビュアー：どうゆうゆれでした？

(4) テレビニュース・トークは、「視覚的な語り」である。それは、語りが、映像とともに互いに証拠となりつつ成立するという特徴をもっている。

(5) テレビニュース・トークは、独特の構造によって、ニュースの独特の説明可能性を達成している。いいかえると、テレビニュースによって伝えられるニュースは、「テレビで伝えられる」という言葉がその表象であるような、ある組織された現実として、それを通じて、「ニュースとしての」観察可能性を体現している。例えば、だれもが気付くように、アナウンサーは視聴者によっては割り込まれない長いターンをもつこと、ニュースは日常的な文章で語られることなどである。

(6) テレビニュース・トークの単位は、番組やその一部であるが、異なった番組やその一部をなす複数のテレビニュースの間に、説明可能な関連性が見られることが多い。テレビニュース・トークは、家庭や友人などの継続的關係における日常的会話と同様に、中断を含みながら、ある判別可能なトピックをめぐる関連しあう、「一連のニュース」をなすものとしても説明可能にされている。この説明可能性の例は、ニュース・トークにおける数字の使用である。事故の死傷者数、犯罪の被害額などは、当面のニュースの内容である出来事を、別の記録された出来事との比較可能性の光のもとで説明するものである。

これらの特徴は、他のいくつかの特徴とともに、テレビニュースを視聴したり、制作する人々が、当然のものとしてみなしている、その自明な特徴である。それらは、テレビニュースの社会制度的な特徴といえよう。テレビニュースの会話分析のめざすべき課題の一つは、これらの社会制度的特徴が、その他のより日常的な特徴とあいまって、

〈いかにして・その場その場で・ニュースを通じて・意味を・伝達しているか〉という問題である。

重要なことは、テレビニュースが新奇でない出来事を通例的な仕方  
で伝えようとするときでさえも、それは、一つひとつ新奇な出来事  
である、ということである。今見ているニュースは、それがいったん放  
送されたものの再映でないかぎり、例えば、昨年と同じ年末の相変わ  
らずの風景であっても、今、私と制作者との間で、あらためて作り出  
されているものである。ごく普通の意味で、個々のテレビニュースは、  
いつも最初のものとして (for another first time) 起こる出来事なので  
ある。

この事情から、テレビニュースの放送と視聴の個別的な現場の詳細  
は、一般的な制約条件に感受的ではあるが、それによって規定され尽  
くされないものとして展開されることがらであり、社会的出来事とし  
てのテレビニュースの現場における詳細を構成している。阪神淡路大  
震災のテレビニュースをめぐる議論の中で気付かれてこなかったもの  
も、この個別的な現場の詳細である。さらには、情報の象徴化がどん  
な条件のもとにおこるのかということ、象徴化を媒介する社会的に共  
有された常識カテゴリー体系はどのようなものであるかということ、  
また、報道の組織や手法がこれらといかに関係しているのかというこ  
と、また、報道形式の通常性と報道内容の非通常性が災害や事件に関  
する報道でどのように関連しているのかということ、これらが重要か  
つ興味深い問題である。

テレビニュースの会話分析では、これらの条件のもとで展開される  
具体的なニュース・トークがその詳細にわたりどのような方法のもと  
で作上げられているかを見ることが課題になるのである。

資料A 3時8分のニュース (TAPE 1/17 D1 27.09-31.42)

：(＃1) えー、時刻は3時 (T1) 8分をまわりました。ひきつづき兵庫県南部地震のニュースをお伝えします。(1.0) 淡路島を震源におきました兵庫県 (T2) 南部地震による被害は、発生から、9時間あまりたってさらに広がり、えー警察庁が午後2時、45分現在でまとめたところによりますと、え、なくなった方はごひゃく、きゅうじゅう、しちにのぼっています。日本国内では高度な、機能が集中した大都市がはじめて、大きな被害に見舞われた地震になりました。え警察庁の、お災(＃2) 害警備本部が、午後2時45分現在でまとめた、地震の被害状況によりますと、なくなった人は兵庫で594人、大阪で3人の、あわ (T3) せて597人となっています。また、行方がわからなくなっているのは、兵庫で531人、怪我をした人は兵庫で933人、大阪で1206人、京都で30人など、あわせて2198人にのぼっています。家屋の、損壊は兵庫県内にせんで、13棟となっているのをはじめ、被害にあった建物はあわせて2163棟にのぼっています。気象庁によりますと、淡路島から兵庫県南部にかけては活発な活断層があり、気象庁(＃3) が地震の波形を分析した結果、(T4) 断層のずれ動き、え一つまり、岩盤の、破壊は、えー最初は淡路島の北部の直下付近で始まり、そのご順次北東の方向へ破壊が進んで、最終的には少なくとも、神戸市の直下付近に(＃4) まで達したと見られ、今回の地震は、淡路島だけでなく、神戸市にとってもまさに震源域が真下にある直下型地震となり、激しい揺れに見舞われて大きな被害が出た可能性があることがわかりました。(＃5) た。(T5) 大阪、管区气象台が、午後2時現在でまとめたところ(＃6) によりますと、兵庫県南部地震の余震は体を感じる地震47回を含めて、これまでに、あわせて(＃7) ごひゃく、よんじゅう、なな回起きています。気 (T6)

＃1《アナウンサー正面》

T1:《名前》

T2:「兵庫県南部地震597人死亡」

＃2《上空から、高速倒壊》

T3:「午後2時45分現在(警察庁調べ)死者 597人行方不明 531人 けが 2,198人 家屋倒壊 2,163棟」

＃3《下から西市民病院》

T4:「神戸長田区市立西市民病院」

＃4《病人》

＃5《車からの街路》 T5:「神戸市中央区」(＃7終了まで) :＃6《倒壊したビル》  
＃7《倒壊木造家屋》

象庁では、今後もしばらくは余震（#8）が続く上、やや規模の大きい余震が起きるおそれもあるとして、地震の揺れで、壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、（#9）余震に対して充分注意してほしいとよびかけています。（#10）淡路島を震源におきました兵庫県南部地震による被害は、発生から（T7）、9時間あまりたってさらに広がり、え警察庁が午後2時、45分現在でまとめた地震の被害状況によりますと、え、なくなった方はごひやく、きゅうじゅう、しち人にのぼっています。日本国内では高度な、機能が集中した大都市がはじめて、大きな被害に見舞われた地震になりました。え警察庁の、お災害警備本部が、午後2時45分現在でまとめた、地震の被害状況によりますと、（#11）なくなった人は（T8）兵庫で594人、大阪で3人の、あわ（#12）せて597人となっています。また、行方がわからなくなっているのは、兵庫で531人、怪我（#13）をした人は兵庫で（T9）933人、大阪で1206人、京都（#14）で30人など、あわせて2198人にのぼっています。家屋の、損壊は兵庫県内でにせん、（#15）13棟となっているのをはじめ、被害にあった建物はあわせて2163棟にのぼっています。気象庁によりますと、（#16）淡路島から兵庫県南部にかけては活発な活断層があり、気象庁が地震の波形を分析した結果、断層のずれ動き、え一つまり、岩盤（#17）の、破壊は、え一最初は淡路島の北部の直下付近で始まり、そのご（#18）順次北東の方向へ破壊が進（T10）んで、最終的には少なくとも、神戸市の直下付近にまで達したと見られ、今回の地震は、淡路島だけでなく、神戸市にとってもまさに震源域が真下にある直下型地震となり、激しい揺れに見舞われて大きな被害が出た可能性があることが（#19）わかりました。大阪、管区気象台が、午後2時現在でまとめたところによりますと、兵庫県南部地震の余震は体に感じる地震47回

#8《広い街路・傾いたビル》T6:「大相撲初場所の時間ですが地震関連のニュースを続けます」:#9《傾いた柏井ビルのアップ》  
#10《アナウンサー正面》T7:「兵庫県南部地震597人死亡」

#11《車からの街路》T8:「神戸市中央区」(#13半ばまで)  
#12《倒壊したビル》  
#13《倒壊木造家屋》\*T9:「午後2時45分……」(#15終了まで)  
#14《広い街路・傾いたビル》  
#15《傾いた柏井ビルのアップ》  
#16《崩落した駅ビル阪急三宮から上層階が倒壊した雑居ビル》  
#17《下から雑居ビルの上方》  
#18《下から西市民病院》T10:「神戸長田区市立西市民病院」  
#19《病人》

(#20)を含めて、これまでに、あわせてごひやく、よんじゅう、なな回起きています。気象庁では、今後もしばらくは余震が続く上、やや規模の大きな余震が(#21)起きるおそれもあるとして、地震の揺れで、壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、余震に対して充分注意してほしいとよびかけています。( #22)

では、今回の地震でなくなった方々のお名前をお伝えします。これまでに各警察署が確認したなくなった方々のお名前です。( #23)

#20《上空からの火災》

#21《#20に続けて、上空から炎上するビルのアップへ》

#22《アナウンサー正面》

#23《死亡者リスト》

## 資料B 高速道路情報 (TAPE 1/17 E1 08:58-09:03)

: えー、XX 記者とともにお伝えしました。それでは、あー、情報を続けます。えー (#1) 地震で大きな被害をうけた近畿地方の鉄道ですが、いまま JR の東海道山陽新幹線や京阪神を中心にした在来線、それから私鉄の一部が止まったままになっておりまして、復旧までにはかなり時間がかかる見通しです。えーこのうち、JR 西日本、からの情報ですが、近畿 (#2) の JR のほとんどの路線は一両日中に運転を再開できる見込みだということであります。えー山陽新幹線 (#3) の新大阪姫路間とそれから東海道山陽線の尼崎西明石間は、えー被害が大きく、ごらんのような状態になって (T1) おります、これは新幹線です、えー復旧までにこれは、2 カ月から3 カ月かかる可能性があるとする見通しを、おー出しております。このなかで JR 西日本の XX 本部長は、今後の復旧のめどとして、えー、今日中に山陽新幹線の姫路博多間をはじめ、(#4) 東海道線の高槻から東の区間などが、えー開通できる見込みだとしています。えしかし、高架の一部が落ちたり列車が脱線する等の大きな被害が出た、えーこの、山陽新幹線の新大阪姫路間と、(#5) それから、在来線です、

#1《アナウンサー正面》

#2《上空から、線路》

#3《#2に続けて、線路崩落のアップ》

T1:「山陽新幹線 兵庫 西宮」

#4《下から空中に浮いた線路》

#5《高架下から線路と空》

え東海道山陽線の尼崎西明石間については復旧までに2、3カ月かかる可能性があるというふうに述べています。(＃6) (1.0) えーさらに在来線でいまも不通になっているのは東海道山陽線の(＃7) 京都三石間です。えーそれから福知山、(T2) あー線、え湖西線、奈良線、片町線の一部、桜島線、姫新線(＃8) も不通になっています。えーそれから、JR大阪環状線は午後6時前に全線で運転を再開いたしました。えーそれから、在来線で運転を再開(＃9) しているところの情報がはいつています。運転を再開しているのは、東海道線のうちの滋賀県の米原と京都の間、北陸線の全線、山陰線の京都と園部の間、え大阪環状線の全線、(＃10) 片町線の片町と四条畷の間、以上の区間運転再開です。JR片町線は開通区間は更に広がりました。現在は片町と四条畷の間で運転されています。次は私鉄です。阪神電鉄が(＃11) 今も全線不通になっています。(T3) 阪急では宝塚線は今日中に、いー今日中に梅田、(T4) ひばりヶ丘(.) (＃12) 花屋敷間で普通列車の運転が再開される見込みになっています(再びT4)。それから、宝塚線は、明日中に全区間で普通列車の運転(＃13) が再開される、見通しです。一方阪急の、神戸線です、梅田、西宮北口間で明日の始発から普通列車が運転を始める見込みです。(＃14) えー梅田、西宮北口間です。(T5) (＃15) えーしかし、西宮北口と三宮間、西宮北口と宝塚間、それに塚口伊丹間についてはレールの破損が特にひどく(＃16) 復旧のめどは、まったくたっておりません、このほかの京阪、(＃17) 近鉄、南海は、いずれもすでに全線で運転を再開し、ほぼ平常のダイヤにもどっています。

#### 資料C ヘリコプター映像 (TAPE 1/17 A1 08:31-08:39)

A : (＃1) では、ヘリコプターのXXカメラマンを呼びます。XXさん。(＃2) (T1) (.) いま

＃6 《下から、ずれた高架》  
 ＃7 《＃6に続けて、破断した高架橋脚》

T2: 「不通のJR各線 福知山、湖西、奈良、片町、姫新」(＃8半ばまで)

＃8 《下から、高架から崩落部へ》

＃9 《上から、宙に浮いた線路》

＃10 《＃9に続けて、崩落した高架》

＃11 《崩落した阪急伊丹駅》  
 T3: 「阪急 伊丹線」

＃12 《伊丹駅表示盤のアップ》  
 T4: 「不通の私鉄 阪神(全線) 阪急(神戸宝塚線)」(＃14終了まで)

＃13 《伊丹駅ホームのアップ》

＃14 《伊丹駅ビル時計(5時46分)のアップ》  
 T5: 「9:00」

＃15 《＃14に続けて、伊丹駅遠景》

＃16 《脱線したらしい阪急電車のアップ》

＃17 《アナウンサー正面》

＃1 《アナウンサー正面》

＃2 《上空より市街地》《以

どこの上空ですか。

B : これ風下入らないでくださいね。

A : えー XX さん伝えてください。

B : いま確認しております。

Q : ( )

B : 場所、移っております。阪神電鉄の沿線ですけれども、場所、移っております。えー、こっからではわかりません。

Q : ( ) (T2) (#3)

Q : (いま阪神住吉駅の近く)

A : えー現在 \* 上空のヘリコプターからのリポー

B : \* えー阪神の住吉駅の周辺です。

A : トなんですけど、どこか \* XX カメラマンは

B : \* 阪神住吉駅の周辺です。

A : 別の人と交信を続けているようですね。

B : えー阪神のこれは住吉駅、の上空だそうですね。

B : 画面中央部から、たいへん大きな火災が起きております。

A : はい。

B : 阪神電鉄住吉駅の周辺です。( #4 ) ( .5 ) 電車が、横転しております。電車が横転しております ( #5 ) ( pause ) どちらが先頭でどちらがうしろの方かわかりませんが、電車が横転して

( pause )

A : はい XX さん続けて ( T3 ) 下さい。阪神電鉄の住吉駅の上空ですね？

B : けむー

A : 私の声が届いていないようです。XX さん続けて下さい。

B : えー電一電車が横転しております、ます。えー、このあたりですね、阪神電車と阪神高速道路、上の方が見えておりますが、つ、阪神電車住吉駅周辺でごらんのように電車が横転しております。( pause ) ( #6 ) ちょうど線路の下の部分が崩れ落ちて、それで電車もひっくりかえったものと思われまます。( pause ) 周辺では火

下 #13 までひとつつながりの  
中継映像) T1 : 「8 : 30」

T2 : 「報告 (カメラマン氏  
名) NHK 大阪」

#3 《火災》

#4 《火災の脇の線路》

#5 《火災の煙の中に入る》

T3 : 「中継」

#6 《阪神電車のアップ》



災がおきています。(pause) さきほど、画面右手の方が神戸側になるんですが、こちらの線路自体も、(#7) (pause) 高速道路と同じように、桁と桁の間で折れ曲がっているように落ちているのがわかりました。(#8) (4 seconds) これからずっと向こうの方もあちこちで火災がおきて見通しが悪くなっております。(4 seconds) (#9) こちらの方もよく見ると、線路が下の方にたれ曲がっているのがわかります。(6 seconds) 列車が線路からはずれて北の方へ、北側の方へ横転しております。(10) (T4) (6 seconds) (#11) 北の方はですね、このあたりは住宅地でしょうか、火災になっております。たいへん広い範囲で火災になっております。(6 seconds) (#12) ほとんどが燃えてしまっているようです。(6 seconds) (#13) この現場に来る途中も阪神高速道路のいたるところで橋桁がおちており、(pause) トラックが横転している姿も見られました。(5 seconds) 完全、電車は完全にストップしています。

: (5 seconds) (#14)

A: はい、神戸市の上空から取材にあたりました、あたっております、うーXXカメラマンの

#7《線路》

#8《市街地遠景へ》

#9《崩落した線路へアップ》

#10《上空から駅舎》

T4:「阪神電車住吉駅」

#11《横転電車の向こうに火災》

#12《火災のアップ》

#13《遠景》

#14《アナウンサー正面》

## 注

- 1) E. A. Schegloff, *Reflections on Talk and Social Structure*, in Deidre Boden & Don H. Zimmerman (eds.), *Talk and Social Structure: Studies in EthnoMethodology and Conversation Analysis*, Polity Press, 1991.
- 2) 樫村志郎「会話分析の課題と方法」『実験社会心理学研究』36(1), 1996, 148頁。
- 3) E. Goffman, *Radio Talk*, in E. Goffman, *Forms of Talk*, Oxford: Basil Blackwell, 1981.

## 参考文献

廣井脩『災害報道と社会心理』中央経済社，1987。

宮田修『危機報道——その時、わたしは』関西書院，1995。

Molotch, Harvey & Lester, Marilyn, News as Purposive Behavior: On the Strategic Use of Routine Events, Accidents and Scandals, *American Sociological Review*, 39(1), 1974, pp. 101-112.